

## 当院におけるベビーマッサージの現状と必要性

医療法人真田産婦人科麻酔科クリニック

○永江里美 内川加代子 酒井康子 津原富久恵 堀井二三代

鄭 香苗 野口あけみ 高柳典子 平川万紀子 平川俊夫

佐賀大学医学部看護学科 山川裕子 産業医科大学産業保健学部 福澤雪子

【目的】当院で導入したベビーマッサージの現状と、母親の精神状態・赤ちゃんに対する愛着形成に注目してベビーマッサージの有用性について検討したので報告する。

【ベビーマッサージの現状】月4回、15分間のマッサージを行った後、助産師による個人面談・指導を実施。その間、母親同士のフリートークとした。マッサージ方法は、植物油（ファナスオイル）を使用し手技は、ピーター・ウォーカー氏ベビーマッサージに順じて行う。環境は、芳香療法（アロマ）と癒しの音楽を使用。

【研究方法】対象と調査期間：平成18年9月～平成19年12月までにベビーマッサージに参加した母親のうち、産後1カ月健診時のエジンバ産後うつ病尺度（EPDS:Cox, 1987）得点が9点以上の20名（以後参加群）。ベビーマッサージ不参加の母親のうち、産後1カ月健診時のEPDS得点が9点以上の20名（以後不参加群）。調査方法：参加群に対しては、ベビーマッサージ実施3カ月後の産後4カ月時に、EPDSと赤ちゃんへの気持ち質問票日本版（吉田, 1998）に記入してもらい対面調査。不参加群も同時期（産後4カ月時）に、同じ質問票を電話で聞き取り調査。分析には、SPSS ver14.0Jによる統計解析（Wilcoxon検定）。研究の主旨及び方法を口頭で説明し、同意を得た。

【結果】ベビーマッサージ導入から233組（母子）参加。産後1カ月時とベビーマッサージ実施後の産後4カ月時における参加群・不参加群のEPDSと対児愛着感情の平均得点の変化については、①EPDS・対児愛着それぞれの尺度において、両群共に産後4カ月時の平均得点は、ウィルコクソン順位和検定で有意に低下していた。②EPDSと対児愛着共に、それぞれの時点で参加群・不参加群の平均点を比較した結果、全て有意差は見られなかったが、参加した母親の主要な感想とし①他のママとお話が出来てストレス発散になった②リラックス出来て楽しかったし、お友達が出来て今も交流がある等、肯定的な意見が多数きかれた。

【考察】マッサージに参加した母親のEPDS得点の有意差は見られなかったが、参加者の感想として精神面への効果が多く述べられた。助産師による個人面談・指導やフリートークでの母親同士の交流が気軽な相談や情報交換の場となり、育児を振り返る機会となったことが、副次的に良い効果をもたらしたと考えられる。